

作が任命され、同じ構内の平房に居住することになった。開拓地における保健・医療は、極めて重要な課題で、初期の開拓団では、日本内地や朝鮮から医師を募集して配置していたが、入植者の増加に伴い医師の確保が困難となったので、代診に属する医療経験者の中から保健指導員を募り、一定期間医療の講習を行なった後、満州国現地医師免許をよえ、開拓総局の指揮下に開拓団に配置していたもので、江上医師の入団もこの措置によるものであった。

吉内の事故死を除いて、これまで病死者は一名も見られなかったが、医師を待っていたかのように、四月に入つて四名が死亡した。(うち幼児二名)

〔辨事 又の整備〕

本部の整備について、二道溝(昌図聚のある街)の弁事起き、三団共同から佐伯だけ独立させ、駅のすぐ前に移転した。前年の営農の成功により、他団より経済的にも優位にあったことが考えられる。また輸送力強化のため、トラックの外に二台の大車を準備し、地元の有力者(大車使)といふ男と契約して専属輸送に当たさせた。この大車使は毎二日で一往復し、敗戦まで続いたが、一度としてトラブルを生むことがなかった。

〔指導員 又の増員〕

本部の移転とともに、営農指導の充実、強化をはかるため、農事指導員一名の増員を申請し、認められて守永俊平(宮崎県高野郡酒谷村出身、四十一才)が新しく着任した。

守永は農業技術員の出身で、満蒙開拓幹部の一般募集に志じて渡満し、所定の訓練を終えた後、佐伯開拓団に

赴任したものであった。守永は佐伯村に骨を埋めることを約し、家族を連れて入団した。

この結果、団員の営農指導は守永指導員が担当することなり、金田指導員は勤労奉仕隊員の指導にまわった。(つづく)

記録

富尾神社の神幸祭

黒沢 会員 山崎 作 一

これまで皆さんから何回となく紹介がありました。黒沢の富尾神社の神幸祭が、去る四月二十五日又し振りに行なわれました。

申すまでもなく富尾神社は、毎年礼城主佐伯惟治公をお祀りする神社であります。黒沢では昔から、村のつづくかぎり永次に神幸祭を行うというお願があるとかで、毎年七月二十五日に祭典が行われておりました。ところが昭和に入って、七月は暑すぎるので、気候の良い四月に変更して行うようになり、終戦後も続けて居りました。何かの都合で、昭和三十九年を最後に中止されていまし。

それから約十二年たちました。何とかして祭典の復興と、と村の老人達や史談会員が呼びかけて来まして、なかなかかまともならず年月が過ぎて居りました。

ところが一昨年、県の「ふるさと振興事業」の一つとして取上げられ、神踊、杖踊が民俗芸能として補助がへき、昨春秋は民俗芸能九州佐賀大会に選ばれて出場し、急に祭典復活の話がまとまりました。

そこで私日、神幸祭典とするには、壊れているお旅所
と建てること、先決と考へ、昔からありましたおひら小平山の
の踊場に、部落の承認を得て、お旅所兼老人憩いの家を
建設して、黒沢部落に寄付することになりました。幸い村
の方々のご協力をいたたいて完成、今年正月の初総会で
富尾神社の神幸祭を行うことを決定し、早速その準備に
かかりました。

もちろん、伝統ある神踊・杖踊・獅子舞などは、十分
修練と積ぶ事が大切、風俗民芸の昔の形をそのまゝに受
けつぎ、また昨秋佐賀大会に出場し、後継者の育成を考
へ、保存会長多田太郎吉光はじめ、皆さんが協力して、
にあかり練習が盛り上りました。一か月ほど前から五日
ぐらいおき、午後八時頃から、区長・加談・頭領の定
を回ってやりました。人数は二十四五人位で、佐賀大会
に出場した者が主体となつて行いました。また、祭典の
余興に、部落の有志、青年、婦人会で素人演芸をするこ
とになり、これもそれぞれ練習をはじめました。

いよいよ待ちに待った四月二十五日になりました。朝
から幸いに上天気。午前八時すぎから部落氏子らは、そ
れぞれ紋服袴などの衣裳ととのえて、神幸祭の行列に
参加、神輿の相伴とするよう、続々神社に参集しました。
まずご出立の行事、神踊・杖踊の奉納のつづく中、神
殿で日神官によつてご神体が神輿に移されました。そし
て定刻午前十時、猿田考神を先頭に、お神輿と中央に長
い行列が出發、笛・鉦・太鼓の道楽に合せて、長い御神
幸の列が進みました。

約一時間でこの神幸祭の行列はお旅所に到着しました。
先ず獅子の度入り、杖の度入りがあり、神輿の安置され
たお旅所の広庭では、神踊・杖踊の三番の願成就がばじ

まりました。また神職によつて神楽の奉納があり、午前
中の行事を無事終へました。

そこで仮設舞台に向つてそれぞれ座をとり、昼食にか
かりました。山海の料理で酒盛がはじまり、賑やかなこ
とでした。

昼食半日から、午後八時頃まで賑わい始めました。昔々
・歌謡・舞踊・劇が次々に演ぜられ、約三十数番、それ
に飛入りかかわり、午後五時まで賑わいはつづきました。
それから神輿のお帰りです。笛・太鼓の樂が朝のよう
にひびき、行列は神社に向いてまいりましたが、皆お神酒がまわ
つていたので、賑わいはしやいりで帰りました。午後六時
半、神殿で御神の儀式があり、富尾神社春の神幸祭典は
まだ明るいうちに全部終了いたしました。

村の人達は満足でした。口々を尋ねて、今日のような
良いお祭りは生まれはじめて、目出度いことだった。
来年その次の年も、今度は毎年つづけよう。と、これ
が村人たちがみんな語り合つたお話しでありました。

私もこれで、大願成就し左気持一ぱいです。来年もま
た、今年にまして多数の皆さんをお迎へして、賑やかな
神幸祭典をしてたいと考へています。

(おあり)

(付記——余自あるがゆえに、別添)

当日は、黒沢の方々からご案内を頂きましたので、
高木会長以下八、九名を伴ひに出かけ、昨秋小倉の大賀
さんが新調寄付されたまじ装束一式、揃いの衣裳で
の相伴、神踊奉納を拝見しました。新聞社の方も数
社見えられ、翌日は写真入りで賑わいの様子を紙面
に出してまいりました。私の手帳には次の記入がある。

四月二十五日 黒沢富尾神社の神幸祭あり。十三年目のこと
なりという。快晴。蒸風は若葉のらふことしきりなり。
お旅所や神踊の度入りの樟若葉